クローズアップ+

本学教員の研究と、研究室をそれぞれ紹介します。

筆跡（ふであと）と対話する

美術教育講座　萱（かや） のり子 教授

どのような筆跡がなぜ美しいのか

書の作品を見て「よく分からない」と感じたことはないでしょうか。手書きの機会が減少した近年は、古い時代の書体や崩した文字は生活の中で使われることが少なくなりました。時代や状況が変わると、文字の姿だけではなく、ものの見方や感じ方も変わります。私が取り組んでいるのは、「どのような筆跡がなぜ美しいと感じられるか」という問題意識に基づく研究です。

たとえば、落書きや書き損じのような筆跡に注目が集まることがあります。そこには、「上手く書いてやろう」という意図が前にでていない、天然で素朴な味わいがあります。他方で、勅命の碑に刻まれた銘のように、一点一画ゆるぎなく組み立てられて厳かな印象を受けるものがあります。主としてテーマにしてきたのは、仮名を典型とする日本の書の美についてです。

国語や書道の教科書では「漢字が使われるうちにだんだん崩されて平仮名が生まれた」と概説され、仮名の優美な姿が称えられます。しかし、その成立過程にはよく分かっていないことがたくさんあります。日本の書の美について考えるには、漢字の文化をどのように受け容れてきたかを多様な角度から検討していくことが課題になります。哲学・文学・歴史学・言語学をはじめとした領域と関係してきます。

筆跡と対話する

そのような場面で、筆跡は一筋の手がかりを発します。それは、「書くという行為のプロセスがそのまま形になる」という性質です。書が「目で見る音楽」だと言われる所以（ゆえん）です。筆の軌跡を手がかりにして、リズムの変化を感じ取ったり、線の強弱から手の微細な振動を読み取ったり、書き間違いの要因を探ったり、といったことが可能です。いつの時代にどのような環境下で何が書かれたか、などを総合していくと、「書く」現場のリアリティが蘇ってきます。すると、大昔の人が残したものであるにもかかわらず、今ここで書いた人と対面しているかのように、筆跡を介して生き生きとした対話ができるのです。

書は「分からない」という初対面の印象をこえて、筆跡と対話を深めていくことは、自分とは異なる環境

正門前の大学名に薄紙をあてて拓本を採っています。

にある人と時間をかけて理解を深めていくことと似ています。多文化共生の時代にある今日、書の美に関するテーマについても、これまでとは違った見方が拓(ひら)かれていくのではと期待しています。

学校教育と書

書道は伝統文化だとよく言われますが、明治以降に西欧から入ってきた近代の芸術文化の影響も強く受けています。学校の教科の中で扱われる「書写」と「書道」にもそれが反映されています。日本の小学校・中学校では国語科の中に「書写」があり、文字を書くことの基本はこの時間に学びます。高校になると「書道」は芸術科の仲間入りをします。毛筆の表現には滲みや掠れが登場し、篆書・隷書などの古い書体や何字も連続する草書の筆跡に出会います。こうした教科の位置づけの違いは、多くの人に書は「分からない」と感じさせる要因の一つになっています。

こうしたことから近年は、教科連携を視野に入れた書の鑑賞学習に力を入れています。特に国語科や社会科、芸術科で学ぶ題材は、「書かれたもの」と関係している場合が多いですから、各教科で学ぶ豊富な知見を交流させていくと、見たり読んだり感じたりする楽しさが広がっていくのではないでしょうか。

ゼミ展のテーマを練るため試作を持ち寄りました。

各自の研究テーマを発表し、質疑で課題を共有します。

ゼミの活動

ゼミでは学部3回生から大学院生まで一緒に集い、毎回意見交換をしながら各々の研究テーマの探索を試みています。現在のところ、日本・中国の書人の筆跡や学書の過程、美文字の規準、日本の学校教育における書写書道、私塾の役割と実際、鑑賞教育、江戸文化の中での書の位置や実態、などに関心が寄せられています。研究室の活動では、各々のライフワークにつながる芽を学生自身で育てていけるよう、支援を心がけています。

年度当初は、学生たちも教員もお互いの様子を窺いながらのスタートでしたが、最近では連携プレーも見られるようになってきました。「ゼミでテーマを設けて活動しよう!」と機運が高まり、学生が企画を立てて学内プロジェクトに応募しました。「墨(ぼく)とあなたの【rela書(tio)n】」という標語のもとに方向性が定まって、目下、年度末の成果展に向けて取り組んでいるところです。一同、書を通じて、学内外の皆さまとネットワークを築いていけることを願っています。

ゼミ展会場の下見、イメージづくりのため
機構本部にある奈良カレッジズ交流テラスへ。

プロフィール

美術教育講座
萱(かや) のり子 教授

大阪大学大学院文学研究科博士課程芸術学専修単位取得退学。博士(文学)。
2022年4月着任。2022年4月より現職。

ゼミ生からの研究室紹介

私たちは「書」を「文字を書く」という視点だけでなく、伝統や文化、教育の視点から捉え、これから書道をどのように継承していくか、また書道の持つ価値を高めるためにどのような方策があるかなどを、学生が各々テーマを決めて研究しています。年度末には、その研究成果を発表するためのゼミ展が開催される予定です。萱先生が着任されて1年目ということで、試行錯誤しながら作品制作や研究を進めています。

教育学部
学校教育教員養成課程
教科教育専攻
書道教育専修　4回生
和歌山県立星林高等学校出身
山田(やまだ) 向日葵(ひまわり)さん